

I

フォーラムの理念・大会概要

趣旨

全国生涯学習ネットワークフォーラム2013は、日本の多くの地域社会が抱えている課題をテーマとして、行政、大学等の教育機関、NPOや生涯学習団体等の民間団体、企業等の様々な関係者及び国民一人ひとりが、生涯学習を通じた新しい社会づくり・地域づくりについて研究協議し、その成果の発信と活動の全国展開を図り、中長期的な取組を推進するための関係者間のネットワークづくりを目指すものである。

2011年度から2013年度までの3年間は、東日本大震災からの復旧・復興や震災から見てきた全国共通の課題解決に資する事業として取り組んできた。今年度は、2011年度の東京大会及び2012年度の宮城県、福島県、岩手県の東北三県での開催成果や震災からの復興に向けた取組を踏まえ、生涯学習によるネットワークを生かした社会づくりや地域づくりのモデル形成や実施、定着化を図るため開催した。

大会コンセプト

岩手大会では、「次世代へつなぐ学びのネットワークづくり～持続可能な地域コミュニティの再生を目指して～」をテーマに掲げ、「体験・参加型」「相互作用型」「学生参画型」の3つの視点で事業を展開した。

体験・参加型

岩手県沿岸部に足を運び直接話を聞き参加・体験する機会の設定

相互作用型

岩手県沿岸部在住者と支援活動者の両者にとっての成果

学生参画型

学生の主体的参加による新しい運営手法

事業概要

(1) 大会名称

「全国生涯学習ネットワークフォーラム2013」(まなびピア2013)

(2) 開催期間

平成25年度の年間を通じ開催

(3) 主催

全国生涯学習ネットワークフォーラム2013実行委員会
(文部科学省、地方公共団体、大学、企業、NPO、その他の関係団体等により構成)

(4) 開催テーマ

次世代へつなぐ学びのネットワークづくり
～持続可能な地域コミュニティの再生を目指して～

事業構成

開催コンセプトを踏まえ、年間を通じた事業を実施した。

プレ・フォーラム

【交流】 聴く 見る 話す

期日：7月6日(土)～7日(日) 場所：宮古市・山田町

対象：大学生等

全国生涯学習ネットワークフォーラム2013の開催に向けて、県内で復興支援活動を行っている大学生等を対象に、被災地の現状や課題について学ぶとともに、フィールドワークの企画、情報交換を行った。自らの活動を振り返り、新たなネットワークを広げ、年間を通じて展開する本フォーラムの「キックオフ」を宣言した。

フィールドワーク

【体験】 見る 気づく 考える 行う つなげる

時期：9月中旬 場所：陸前高田市、大船渡市、山田町、宮古市

対象：全国の大学生等

プレフォーラムのワークショップの成果を踏まえ、大学生による企画ワーキンググループを中心として検討を加えた復興支援プログラムを沿岸各地にて展開した。

メインフォーラム

【学び】 つなげる 広げる

日時：11月16日(土)～17日(日) 会場：マリオス(盛岡市)

対象：全国の大学生、生涯学習行政、生涯学習団体、NPO関係者、生涯学習活動者等

夏のプレフォーラムを皮切りに、県内沿岸部において大学生等が、「自ら考え」「集い」「学び」「交流を深める」支援活動に主体的に取り組んできた、フィールドワークの成果を発表。

また、全国各地の地域コミュニティ再構築に係る先進的な事例に学び、「次世代へつなぐまちづくり、人づくり」について参加者全員で学び合う機会を提供した。

アフターフォーラム

【分かち】 つなげる 広げる 発信する

期日：2月6日(木)～7日(金) 会場：岩手県立生涯学習推進センター(花巻市)

対象：全国の大学生、生涯学習行政、生涯学習団体、NPO関係者、生涯学習活動者等

メインフォーラム後の活動の報告を行うとともに、フォーラムと連携した岩手県立生涯学習推進センターの研究を発表し、協議を深めつつ、取組の総括と成果の共有を図った。

参加事業・関連事業

本フォーラムの趣旨に賛同し、各団体や機関等が生涯学習の普及・啓発を図るために自主的に実施する事業。

(参加事業：岩手県内 関連事業：全国)

Ⅱ

プレフォーラムの概要

- 開催日 平成25年7月6日(土)・7日(日)
- 会場 宮古市新里生涯学習センター「玄翁館」
岩手県立陸中海岸青少年の家
宮古市内、山田町内、三陸鉄道車内

交流 ——— 聴く 視る 話す

全国生涯学習ネットワークフォーラム2013の開催に向けて、県内で被災地支援活動を行っている学生等を対象に、被災地の現状や課題について学ぶとともに、情報交換を行った。自らの活動を振り返るとともに、新たなネットワークを広げ、年間を通じて展開する本フォーラムの「キックオフ」を宣言した。



プログラム構成

7月6日(土)

会場	時間	内容
新里生涯学習センター	10:00	○会場着
	10:30～ 11:00	○開会行事 ・主催者挨拶／文部科学省生涯学習推進課長 ・歓迎の言葉／宮古市長 ・事業説明／岩手県教育委員会生涯学習文化課
	11:00～ 12:00	○レクチャーフォーラム 「被災から復興へ ～次世代への期待～」 岩手県中核観光コーディネーター 草野 悟 氏
宮古市～山田町		○昼食・休憩
	13:30～ 17:00	○被災地復興現状の視察と座談会 A班:集会所設置によるコミュニティ再生への取組 宮古市鍬ヶ崎地区青年リーダー〈鍬ヶ崎仮設集会所〉 B班:街中産業再生と地域活性化による街の顔づくりへの取組 やまだ夢プロジェクト〈スーパーびはん 会議室〉 C班:思いをつなぐイベント開催による地域づくりの取組 宮古市「鎮魂の祈り実行委員会」等 〈長町公園仮設住宅2-1談話室〉
陸中海岸青少年の家	17:00～	移動 夕食 入浴 情報交流会 等

7月7日(日)

会場	時間	内容
陸中海岸青少年の家	9:00～ 11:00	○ワークショップ 「被災から復興へ ～継続・つなぐ 心と支援～」 ①情報交流 ②フィールドワーク企画 フィールドワーク企画を行い、企画実施委員会の素案とする。 ③まとめ 分かち合いの発表に向けてのまとめ
		移動 (青少年の家→三鉄宮古駅)
三陸鉄道車内	12:00～ 13:40	○講話 「三陸鉄道復旧への道 三鉄の地域貢献」 三陸鉄道株式会社代表取締役 望月正彦 氏 ○分かち合い ・1日目視察会のグループごとの報告 ・ワークショップの報告
	14:00	○閉会行事 ・キックオフ宣言 ○会場発

開催概要

■ レクチャーフォーラム 「被災から復興へ ～次世代への期待～」

岩手県中核観光コーディネーター 草野 悟 氏

被災地の現状と課題を踏まえ、現地のニーズに即した継続的な支援のあり方について講話いただき、事業への参加目標の共通理解を図ることができた。



■ 被災地の復興現状視察と座談会

A班：集会所設置によるコミュニティ再生への取組

(宮古市鉾ヶ崎地区青年リーダー)

場所：鉾ヶ崎仮設集会所

B班：街中産業再生と地域活性化による街の顔づくり

(やまだ夢プロジェクト)

場所：スーパー「びはん」会議室

C班：思いをつなぐイベント開催による地域づくり

(宮古市「鎮魂の祈り実行委員会」他)

場所：浄土ヶ浜旅館 長町公園仮設住宅談話室

被災後、地元で地域づくりに尽力されている方々から、被災当時の状況、復興に向けた取組等の話をいただいた。その中で出された課題をともに解決していくための支援について意見を交流し合い、互いの考えや思いを共有する時間となった。



■ ワークショップ

「被災から復興へ ～継続・つなぐ 心と支援～」

ファシリテーター 草野 悟 氏 (全体)

地域コーディネートセンターみやこ代表理事

宮古シネマリーン支配人

岩手大学三陸復興推進機構特任研究員

(一社)子どものエンパワメントいわて学習支援課長

金野 侑 氏

櫛 桁 一 則 氏

船 戸 義 和 氏

浅 石 裕 司 氏

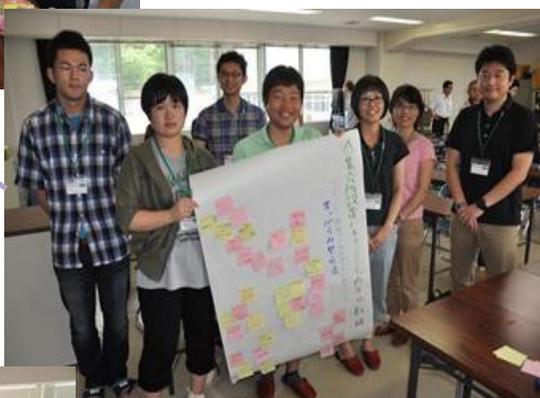
前日の復興現状視察と座談会後の意見交流を踏まえ、課題解決に向けた継続的支援活動による地域づくりについて、考えを深め合った。

また、9月に行うフィールドワークの企画を検討した。



被災地である山田の出身だが、みんなが故郷のために真剣に考えてくれてうれしかった。自分もボランティアとしての活動に関わっていききたいと思う。(盛岡大学2年)

宮古市を支援している自分たちの活動につながる内容だった。岩手の学生との交流ができたので、次の活動につなげていきたいと思う。(立命館大学2年)



自分たちの活動の参考になり、参加してよかった。フィールドワークにも参加したい。(岩手大学2年)

■ 講話 「三陸鉄道復旧への道 三鉄の地域貢献」

三陸鉄道株式会社代表取締役 望月 正彦 氏

震災津波による被災状況と三鉄による地域活性化への取組について講演いただいた。

各グループに2日間の意見交流のまとめを発表し、互いの考えを共有しつつ、本フォーラムのキックオフを高らかに宣言した。



Ⅲ

フィールドワークの概要

- 開催期間 平成25年 9月中旬
- 会 場 岩手県沿岸被災各地
宮古市・山田町・大船渡市・陸前高田市

体験 — 見る 気づく 考える 行う つなげる

プレフォーラムで共有した課題の解決のため、その後のワーキンググループで検討を加えた復興支援プログラムを沿岸被災地において展開した。

被災地と支援する大学生の両者にとって成果が上がるよう、地域のニーズを十分に踏まえつつ、大学生自身の学びとネットワークの強化を目指した。



フィールドワークの展開イメージ

大学生が企画し、9月上旬から中旬にかけて、県内の被災各地においてフィールドワークが展開されました。



PiKA PiKA 光の支援メッセージづくり

平成25年9月10日(火)～9月12日(木)

宮古市内(県立宮古北高等学校 宮古市立津軽石中学校 三陸鉄道田老駅 等)
陸中海岸青少年の家

「宮古の人たちの笑顔がたくさん見たい」「未来に向けて元気や明るさが持てることをしたい」「地域の大人から子どもまでみんなで一緒に活動できることがしたい」という大学生の熱い思いが込められてスタートしたPiKAPiKAプロジェクト。PiKAPiKAをスタートさせた大阪電気通信大学総合情報学部准教授 ナガタケシさんの指導や協力のもと、同大学の学生と共同で実施しました。

「PiKA PiKA」って、なに!?

PiKAPiKAとは、光のアートのこと。暗闇の中でペンライトの光を使い、空中に描いた色とりどりの文字や絵を映像に浮かび上がらせるものです。絵が得意、苦手も関係なし。だれもが落書き感覚で楽しみながら、しかもとってもステキな文字や絵を完成させることができます。



津軽石中学校のみんなと「PiKA PiKA」

津軽石中学校の生徒たちは、大学生や大人を目の前にして緊張感いっぱい。説明を受けているときもドキドキ。しかし、ペンライトを片手に練習で〇をスタートに描き始めると、笑顔がこぼれ「オー」という歓声。「好きな果物」「好きなもの」「宮古の海」など、どんどん描き進めるうちに笑い声やにこにこ顔がいっぱい。最後は、全員で1文字ずつ分担、記念の映像を残しました。

宮古北高等学校のみんなと「PiKA PiKA」

宮古北高等学校には、8月下旬に映像制作の事前打合せで訪れており、今回は2度目の来校。大学生と高校生は、前回一緒に「どんな映像にしたいのか。」という話し合いをしていたため、また、年齢も近いためスムーズに撮影が進行。大きな花が咲くまでの連続映像やクラス毎にスポーツの動きを表現した映像などが、さまざまなアイデアのもと作成されました。

最後に高校生から「大学生がリードしてくれたため、楽しんで取り組むことができました。貴重な体験ができました。」という感謝の言葉をいただきました。



田老地区の方と「PiKA PiKA」

撮影場所は、三陸鉄道田老駅。震災で被害が大きく、町の中心にひっそりとたたずむ場所。撮影場所に地域の方が来てくれるかどうか心配していましたが、そんなことはどこ吹く風。小学生から高齢の方々まで、たくさんの人たちが集まってくれました。そして、田老地区のすばらしいところを紹介してもらいながらの撮影。参加者の方からは、「大学生・高校生が頑張っていて未来も明るい。」「初めてのPiKAPiKA。ライトの光で上手に見えて良かった。」などの感想をいただきました。



参加した大学生の声

中学生や高校生と交流することができて楽しかった。中学生の笑顔が一番良かった。普段できない体験が出来てとても楽しかったし、大阪電気通信大学の方々ひとつのものを作ることができてよかった。(富士大学学生)

みんなでPiKA PiKAを作ることはやっぱり楽しい。みんなで何かをすることで輪を広げて、元気を広げて行きたいと思った。(大阪電気通信大学学生)

フィールドワークB

「山田発！食のこだわりマップづくり」

平成25年9月17日(火)～9月19日(木)

山田町内 県立陸中海岸青少年の家

被災地である山田町をフィールドに、県産食材を使用するなどのこだわりを持った「食」とそれを作る製造者、料理人に焦点を当て、「食のこだわりマップづくり」を行うことを通じて、食とこれを作る人の魅力を発信します。
この取組によって、山田町の交流人口の増加の契機となり、復興の足掛かりとなることを狙います。

Aグループ 荒川農産物加工組合にて郷土料理づくり・インタビュー

「合言葉は“しなみ”？…もちもち感を表す言葉」

Aグループのフィールド・ワーク初日の訪問先は、荒川農産物加工組合。郷土料理を教えて頂いた先生は、佐藤ミノリさんと齋藤みつ子さんです。参加した学生は、以前に町内の朝市で知り合いになったとのこと。再会を楽しみに訪問(覚えて下さっていました)。

豆畑を見学した後、実際に「豆すつとぎ」と「団子」づくりを教えて頂きました。その際、米粉の固さ加減を“しなみ”があると教えて頂いたのです。食欲旺盛なAグループ3人娘(以下“しなみ3人娘”と呼ぶ)は、“しなみ”にハマったのです。

勿論、食べていたばかりではなく、ちゃんとつくりましたよ！

今回のフィールド・ワークのキーワードでもある「食のこだわり」についても、しっかりインタビューしました。その成果は、メインフォーラムにて紹介されることでしょう。

“しなみ3人娘”は、お二人の先生方を「かわいい！」と表現(目上の方には、ちょっと失礼...)。でも、食にこだわりと愛情をもって料理しているお二人の瞳は、とても輝いており、それが「かわいい！」としなみ3人娘の目に映ったのかもしれない。



山田湾ベーカリーでインタビュー&体験 (ケータリング販売体験・ピザづくり)

酵母にこだわる手作りパン工房で、すごいパンやピザ発見！“しなみ3人娘”が2日目に訪問したのは、手作りパン工房山田湾ベーカリーさん。ここは酵母にこだわっているお店。何と、石割桜の花粉から採れる酵母を使用しているのです。勿論、岩手県内産の食材にもこだわっており、岩手町産小麦「ゆきちから」を使用しています。大学生は、パンの袋詰め作業、ケータリング販売(売り上手でビックリ!)、ピザづくりを体験。大町邦子さんをはじめ、従業員の皆さん、みんないい人達ばかりです。そして、「こだわり」をもった職人魂を感じました。





Bグループ

山田湾に浮かぶカキの養殖棚にて引き揚げ作業を体験

Bグループの3名は、大沢漁港に移動し、大沢養殖研究会 中村敏彦さんの舟に乗せていただき、牡蠣の養殖棚引き揚げ作業を見学しました。天気も上々、波も穏やかで、透明度が高く、澄み切った海につるされている牡蠣を目の当たりにしました。



その後、中村さんが震災後にご自身で再建したKH BASE(牡蠣、帆立小屋)で、水揚げしたばかりの殻剥き作業を体験。簡単に見える作業は、いざ始めてみると、最初の殻に穴を開けることさえ至難の業。それでも、こつを掴み始めるとどんどん殻を剥くことができ、作業が楽しくなり、「もっと剥きたい」と牡蠣を追加してもらいました。中村さんに牡蠣作りの魅力、山田の牡蠣のセールスポイントなどインタビューした後、剥いた牡蠣をお土産にいただきました。

ちょうど昼食時間となったので、やまだ観光物産館「とっと」で購入した帆立貝や魚と一緒に、自分たちが剥いた牡蠣も焼いていただきました。さっきまで海にいた牡蠣が美味しくない訳がなく、自分たちが剥いたということが更に味を引き立てます。食事後は、「とっと」事務局の佐藤博子さんにインタビュー。この店の一番の売りは何か、これから、どんなことをしていきたいかなどをお聞きすることができました。



マップのためのランドマーク探し

「これじゃあ、仮設店舗にお客さんが行きたくても、行けないじゃないですか。」国道から仮設店舗までたどり着けるランドマークを探しながら、参加者のつぶやき。

ランドマークになる建物などが津波で流失、国道からの店舗までの表示がほとんどありません。わずかに残る建物や表示などいつまでそこにあるかわからない...

だからこそ、今回のフィールドワークの意味があるのだと、笑顔で、ランドマークを探し続けます。

「震災のときはアメリカに居て、実感が無かったんですが、今、震災を感じています。」神奈川からの参加大学生が、草が生えて線路の先が見えなくなっている踏み切りで佇みながら、ポツリと話しました。

Cグループ

アカモクで新たな商品やメニューを開発する「三陸味処三五十(みごと)」でインタビュー

“山田町のアカモクをもっと全国に広めたい！”

“アカモクと共に山田町を活性化させたい！”

“アカモクで新たな商品やメニューを開発したい！”などなど、山田湾で採れる『アカモク』への思いを熱く語る大杉さん(三陸味処三五十)

そんな『アカモク』も以前は地元の人には見向きもされず、「あんなもの食べるの！美味しいの？」と言われ、捨てられていました。

しかし、調べてみると、『アカモク』はものすごく栄養価が高いことが発覚！カルシウム、カリウム、鉄分、美容にも良いとのこと。

そこで大杉さんは、『アカモク』をなんとか活用できないものかと15年も前から地道に研究を続けて、『アカモクの佃煮(命名「山田のおみごと」)』を製品化したのです。

その後も『アカモクラーメン』『アカモクスープパスタ』など新メニューを開発し、山田の町から『アカモク』を発信しています。

山田町、そして岩手の新しい名産にしたいという、熱い思いをもって『アカモク』普及に取り組んでいる大杉さん。震災があり被災地となった山田町を、山田湾産の『アカモク』で盛り上げていきたいという大杉さんの情熱はこれからも続きます！



地産地消にこだわるうどん店「釜揚げ屋」で取材

震災により以前の店舗はなくなり、現在は仮設店舗で営業している「釜揚げ屋」の店主川村さん「インタビューに応じている暇などない。私の動きを見て、肌で感じて体験してもらいたい」。

すぐに学生3名はエプロンを身に付け、作業場へ。

学生は、名物生せんべいの袋詰め、営業前の下準備、ランチに出すメニューの調理等々、ひたむきに取り組みました。

そんな学生に、時折川村さんが声をかけ、従業員の皆さんも優しく学生に教えている光景が見えます。

釜揚げ屋は素材と地産地消にこだわりを持っています。県産小麦をブレンドした自家製麺、素材にこだわった出汁やたれ、うどんを彩る食材も厳選しています。



ランチ時間が終了後、学生たちはうどん打ちを教わりました。ここでは学生の質問にも答えてくださいました。仕事に対する厳しさと、人と接する大切さを改めて教えてくれた職人さんでした。

また、釜揚げ屋のうどんを食べに行きたいと感じたのは私だけではないはずです。



最終日 共通作業

食のこだわりマップWEBコンテンツ作成・振り返り・分かち合い

最終日、「山田発！食のこだわりマップ」を構成するWEBコンテンツ作成を行いました。

フィールドワークで「見て」「聞いて」「触れて」「体験して」「感じた」それぞれの思いを持ち寄りながら、ワイワイガヤガヤ楽しそうに作業を進めます。

この日で、マップ完成！とまではいきませんでしたが、「また山田に来たい！またあのの人に会いたい！また食べに来たい！」そして「つくる体験をしたからこそ発信できるものがある！」という思いをみんなで共有することができました。参加した大学生そして山田町の方々にとって、それぞれに意義のあるマップを今後のワーキンググループで仕上げていくことを確認し、山田を後にしました。



参加した大学生の声

初めて被災地に行ってみて、ニュースで見るとよりも圧倒的に衝撃を受けました。しかし、訪問させていただいた人々は、とても前向きで、自分の作るものに自信を持っていて、その気持ちを応援したいと思いました。山田の人々だけでなく、一緒に3日間ともにした仲間との出会いも交流人口を増やすという意味でとてもいい出会いでした。(立教大学生)

交流人口を増やすということは難しく、あの人に会いに行くというのはあまりないのではと思っていたが、今回のフィールド・ワークで「人に会いに行くってこういうことなんだ！」「交流人口を増やすってこういうことなんだ！」と自分の中の考えが変わるような体験ができ、とてもよかった。(岩手県立大学生)

フィールドワークC

「秋祭り DE 地域交流」

平成25年9月14日(土)～9月15日(日)

宮古市赤前小学校グラウンド仮設住宅 県立陸中海岸青少年の家

被災地である宮古市をフィールドに、流しそうめんや昔遊びなどの交流的な催しによる秋祭りを開催することを通して、仮設住宅にこもりがちな方が、ともに楽しみ交流する契機をつくりだすことを狙い実施したフィールドワークです。このフィールドワークには、被災地において継続的に支援活動に取り組んでいる「いわて銀河ネット」のメンバーにも参加していただきました。

2013年9月14日、三陸沿岸は久しぶりの真夏日となりました。木陰に涼を求めたくなる暑さの中、「秋祭りDE地域交流『赤前流しそうめん大会』」が、宮古市立赤前小学校グラウンド仮設住宅で開催されました。

全国各地から集まった学生9名が、会場の準備にとりかかります。

竹を数本組み合わせると流しそうめんを作るのですが、これがなかなか安定しません。学生たちが四苦八苦していると、見かねた佐々木自治会長さんがそっと助け舟。試行錯誤の末、2本の立派な樋ができあがりました。佐々木会長さんには、事前の打ち合わせから当日の実施に至るまで、本当にたくさんお世話になりました。流しそうめんを茹でるのは女子学生の担当。屋外での調理に悪戦苦闘していると、こちらにも心強い助っ人が。なんと、赤前のお母さんたちが手伝いに来てくれたのです。実はこの祭り、食べてもらったり、楽しんでもらったりするだけではなく、準備段階から地域の方も一緒になって進める「参加型」の交流を目指していました。いろいろと話をしながら調理する学生とお母さんたち。笑顔と笑い声に包まれながら、流しそうめんは美味しく茹で上げていきました。



準備中に、赤前のお父さんから嬉しい差し入れもありました。地元の牡蠣や海藻を使った浜の料理、ととてもおいしかったです。ご馳走様でした。

学生の声に誘われ、赤前の皆さんが徐々に集まってきました。いよいよ「流しそうめん」開始です。仮設集会所からホースで水を引き、竹の樋に水を流します。そして待ちに待った「流しそうめん」の投入。真夏のような日差しの中、大きな歓声が上がります。やはり元気が良いのは子どもたち。流れる流しそうめんを一生懸命すくい(時には手づかみ)、豪快に食べていました。

お父さん、お母さんたちも、たくさん食べてくれました。おじいちゃん、おばあちゃんたちも、おいしいと言ってくれました。

住宅の外に出ることのできないおじいちゃん、おばあちゃんには、学生たちによる「宅配流しそうめん」。こちらも大好評でした。このようなイベントは赤前では久しぶりのこと。「流しそうめん」を通じて赤前の皆さんと学生が集い、楽しい一時を過ごすことができました。

この日の午後にはサロン活動、夕方には花火大会を行いました。流しそうめんとは異なり、穏やかな雰囲気の中、ゆっくりと時が流れていきました。浜から吹く心地よい風に包まれながら、祭りの1日目は無事終了しました。



翌15日は、あいにくの小雨交じりの天候でしたが、サロン活動や昔遊びを通じて、心安らぐ時間を共有することができました。

この祭りを実施するにあたり、学生たちは常に赤前の皆さん一人一人に寄り添って活動しようと努めていました。自分の思いを前面に出すことはせず、相手の声に耳を傾け、共感しようとする彼らの真摯な姿勢に感銘を受けました。全国各地から集まった学生9名が作り上げた、心温まる「秋祭り」。三陸の復興に向け、輝く光を見出した2日間でした。



参加した大学生の声

初めは、このイベントの意味は何なのかなと考えることがありました。私たち学生と仮設の人々が交流して何になるのだろうと思っていました。しかし、今ではこのイベントを通して皆さんのつながりを支援することになることに気づきました。とてもいい経験になりました。(高知県立大学生)

世代間交流等も目的に企画されたとのことで、その場が住民同士や学生などの交流の場となったことはもちろんのこと、イベントをツールとして、その前後においても交流のきっかけを作ることができたと思う。今後も学生として、イベントをどう利用するか考えることで、支援の幅が広がるのではないかと考えた。(立教大学生)

4日間、赤前仮設に行き、夜にチームで話し合っていくことで、一人では味わえない何倍にも増した経験を得ることができた。2日間の活動から生まれた笑顔があり、チーム一人ひとりもそれぞれ目標を立てて短期間だったが忘れられない思い出ができた。仮設の皆さんも忘れないでいてくれると嬉しいし、自分たちは得た経験ですっともっと成長していきたい。(四国大学生)

フィールドワークD

「足湯ボランティア in 陸前高田」

(既存の活動と連携して実施)

平成25年9月4日(水)～9月7日(土)

陸前高田市・大船渡市内仮設住宅

被災地である陸前高田市をフィールドに、足湯及びサロン活動を通して、被災地域の住民の方々の心を癒すとともに、そこから得られたつぶやきをもとにこれからの支援活動のあり方について考える契機とするために実施しました。本フィールドワークは、これまでこの活動に取り組んできた東北大学、神戸大学の学生と連携して、県内の大学生も参加する形で行いました。

夏の暑さがいくぶん和らいだ、爽やかな晴天の陸前高田市内。「奇跡の一本松」の前を通り過ぎ、高田松原の松林を思い出しながら市内最大規模の「モビリア仮設住宅」へ。震災後、何もなくなった市街地は少しずつ土地のかさ上げが行なわれ、所々島のような台地となって山沿いの住宅地を隠しはじめています。

お盆過ぎの9月上旬、モビリアの集会所は来る人もまばらで、ツクツクボウシの蝉の音がひびきわたり、ゆったりとした時間が流れていました。入居している方から漬け物をいただくなど終始くつろいだ時間が過ぎていきました。



今回の「足湯ボランティア in 陸前高田」は神戸大学と東北大学の学生ボランティアと岩手県内の大学生(参加者のべ198人)とが一緒に少人数に分かれて仮設住宅をまわり、足湯やタオルでつくるマスコット「まけないぞう」を入居者の方とつくりながら、ゆったり交流する企画でした。しかし、このゆったりさには大きな意味が隠されていたのです。遡ること一週間前、初参加の県内大学生向けに今回のボランティアの注意事項等、レクチャーをじっくり行なっています。

「足湯講習会」

日時:平成25年8月29日(木) 場所:岩手大学エントランスホール

対象:ボランティア活動に興味関心のある学生、社会人の若者 等

内容:講義「ボランティア支援活動における足湯の効果と留意点」

講師 東京大学被災地支援ネットワーク 東京大学名誉教授 似田貝 香門 氏

「足湯実践講座」

講師 被災地NGO協働センター CODE海外災害援助市民センター

事務局長 吉椿 雅道 氏

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室コーディネーター 藤室 玲治 氏

被災者が癒される足湯の手法を学ぶこと→被災地との関わり方の一つ的手段

被災者一人ひとりを個人としてこだわること→「出会い」「ふれあい」「今在ることに全力を尽くす」

足湯での「つぶやき」を蓄積すること→分析し、「実践知」として活動に活かす

心の負担を感じている被災者を足湯を通して発見→専門家へつなげる 他





実に神戸大学は16回目、東北大学は7回目のこの足湯ボランティア。既に顔見知りになった学生さんもおり、仮設での立ち振る舞いがごく自然です。...関西弁をのぞいては、岩手の学生さんも引っ張られるようにすんなり馴染んでいきました。「ここは被災地と呼ばれる場所ですが、私にとって第2の故郷のような気がします。会いたい方が大勢いますから...」神戸大リーダーの言葉。自分の田舎のおじいちゃんやおばあちゃんと久しぶりに合う感覚のようです。「被災者一般」という匿名性の高い支援ではなく、「一人ひとりの個へ向かう支援」の実践が垣間見られました。

「モビリア」以外にも行ってみました。竹駒小学校仮設住宅、大船渡市赤崎小学校仮設住宅です。そこでも、仮設住宅の集会所では、穏やかに、にこやかに足湯ボランティアを実践していました。足湯を楽しむ方、お茶を飲みながら会話を楽しむ方、「まけないぞう」をつくる方、折り紙を大学生に教える方、時としてニコニコと話したり、亡くなった家族の思い出を語ったり...内容の濃淡の違いはありますが、ゆったりとした活動だからこそ、被災者の言葉を引き出すことができるのです。

奇をてらわず、被災者一人ひとりそれぞれに寄り添った温かい支援。そこから紡ぎ出る被災者の言葉を大事し、共感し、時として専門家に繋ぐ姿勢こそがこれからの支援のヒントになる気がしました。



参加した大学生の声

足湯講習会で学んだことを生かしたいと思い、初めて参加した。仮設の皆さんや他の大学との交流ができてよかった。これからも活動に参加したい。(富士大学生)

阪神淡路大震災の記憶は小さかったのではないが、親から話を聞いている。なので、東日本大震災で被災した方の役に立ちたいと思ってきている。説明をつけながら現地を実際に見て、津波の恐ろしさを実感した。(神戸大学生)

フィールドワークのためのワーキンググループ活動



7月のプレフォーラムを経験した各大学の学生たちは、9月のフィールドワーク(以下FW)に向け、それぞれワーキンググループ(以下WG)を組織し、被災地の地域課題を踏まえた支援活動について自分たちで考え、プランを組んだ。地域を再訪し、調整を図る中、FWとして設定した9月はサンマ漁の最盛期であり、受け入れが困難である現実に直面するなど、紆余曲折があった。それでもコーディネーターの指導の下、何度も検討を重ねた結果が、上記のようなFWに結びついたものである。

各FWの活動の後、その成果をまとめ、メインフォーラムにおいて発表するべく、それぞれWGで作業を行った。学生が集まりやすい夕方から夜にかけて、3回から4回程度のWGでの整理・分析・検討を進めた。これに先立ち、それぞれのFWの主だったメンバーが集まり、報告会を開催、メインフォーラムまでの工程について共通理解を図った。コーディネーターによる支援の下に、各WGでは、写真や映像の編集、発表原稿の執筆、プレゼンテーション用のスライドの作成などに力を注ぎ、本番の発表に備えた。

このWGによる活動は、単にFWの活動の内容やメインフォーラムでの発表の質を高めるのみならず、今後の活動に向けた大学間のネットワークの形成にも役立つものであった。

